教材活用例（6）「夢とロマンを追い求めて　～彫刻家　圓鍔勝三～」
〔中学校第３学年　主題：理想の実現　内容項目：１の（４）〕

（１）開発資料の実際

ア　素材の説明

（ア）素材の概要

〈素材―圓鍔勝三―について〉

尾道市御調町出身の彫刻家。

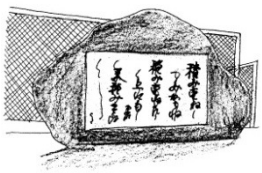
自由な発想，イメージによる彫刻を制作・発表。野外彫刻にも意欲を燃やし，全国各地に記念像を制作している。日展特選４回，日本芸術院賞など受賞作品多数。日展顧問，日本芸術院会員，多摩美大名誉教授などを歴任，83 歳のときに文化勲章を受賞した。

明治38年（1905年）	現在の尾道市御調町に生まれる（勝二と命名）。
大正10年（1921年）	河内小学校高等科を卒業する。 京都の彫刻師 石割秀光氏の内弟子となる。
昭和 3年（1928年）	上京し，日本美術学校に入学する。
昭和 5年	第11回帝展に「星陽」を出品，初入選。
昭和21年	第2回日展に「砂浜」出品，特選。その後3回特選。
昭和35年	勝二を勝三と改名する。
昭和63年	文化勲章を受章する。
平成元年	広島県名誉県民となる。
平成 5年	広島県御調町に圓鍔記念公園・記念館開館。
平成15年	逝去。

圓鍔勝三の経歴

（イ）４コマ絵

圓鍔勝三の作品制作に対する考え方や生き方が表れ，人間的魅力が伝わるエピソードを中心に，４場面構成とした。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	「芸術の場合，『完成』などあって無きに等しい。『芸術』の道は遠いし，広く，無限である。～」という，芸術に対する圓鍔勝三の考えがよくあらわれている，自身の言葉を紹介。	圓鍔勝三は，美術学校の先生や周りの芸術家から，さまざまな素材で彫刻を制作する創作態度を揶揄されていた。にもかかわらず，信念をもって作品のイメージに最も適した素材を使って制作を続けた。	長い歴史をもつお寺から仁王像の制作を依頼された。既成のものにはこだわらず自分の発想を大事にしていく創作への姿勢と，重くのしかかる伝統とのはざまで，勝三は構想を練りに練り，他には例を見ない形の仁王像を完成させる。	母校の小学校の石碑に刻まれた勝三の言葉「積み重ね　つみかさね　～」と，出身地である御調町に建っている圓鍔記念館の様子を紹介。

イ　資料の解説

【作成の要点】

自分の人生において，夢や理想をもって努力することが大事であり，すばらしいことであることは，誰もがわかっていることだろう。しかし，中学生ともなると，こうなりたい，こうありたいという夢や理想が，簡単に実現できるような易しいものではないことも認識されてくる。それ故その道のりの遠さに，「夢は夢。実現するのは難しい。」「夢はあるけど今はこんなもんでいいや。」とあきらめたり妥協したりして，毎日を送っていることもあると思われる。

本資料は，自分の表そうとする題材の精神を大切に，既成のものにとらわれず自由に表現したいという自分の理想とする創作態度を貫くために，信念をもって試練を乗り越え，日々精進を重ねていった彫刻家圓鍔勝三を描いている。数々の賞を受賞し，功績を認められているにもかかわらず，年を重ねてからもなお「積み重ね　つみかさね　積み重ねた上にも又積みかさね」という座右の銘そのままの創作人生を送った彼の生き方から，理想の実現のためには，安易に妥協せず，今なすべきことを着実に取り組んでいくことが大切であることを改めて考えさせたい。

【心に響くちょっといいはなし】

○　勝三が小学生のときのこと。兄が部屋の片隅でうつむいて何やらしている。見ると，棕櫚（しゅろ）の枝でハンコ彫りをしているのだ。「おもしろそうだねえ。僕もやってみよう。」勝三（当時は勝二）は彫り上げたハンコを，夏休みの宿題の１ページに押し，提出した。すると，担任の先生が「見てごらん。圓鍔くんの彫り物は上手だこと。」とみんなに見せながら褒めてくれたのである。それまであまり先生に褒められることのなかった勝三は，それがうれしくてハンコ彫りに熱中するようになる。これが，彫刻を目指すきっかけであったように思うと，勝三は述懐している。

○　小学校の卒業を控え，美術品を手がける彫刻家になるための勉強がしたいと密かに思っていた勝三。しかし家業の農業を手伝ったり奉公に出て修業したりするのがあたり前だった当時の田舎にあって言い出すこともできないでいた。それでも父親の理解でやっと，仏壇の装飾や欄間などを手がける京都の彫刻師のもとに４年間内弟子として入ることが決まる。なかなかうまく彫ることができない勝三は，盆暮れの休みに故郷に帰る時間も惜しんで，京都でのみを手に一心に木に向かっていた。他の弟子と同じくらいの仕事ができるようになると，今度は他の人が５日で仕上げる仕事を，３日でできるようになろうとまた努力を重ねていくのだった。しだいにその腕を認められ兄弟子よりもたくさん稼げるくらいに仕事が入ってくるようになったのだが，彫刻家への夢をあきらめきれない勝三は，弟子入りから７年の後，頼る人もいない東京に一人向かったのである。

ウ　資料全文

「夢とロマンを追い求めて　～彫刻家 圓鍔勝三～」

「芸術の場合，『完成』などあって無きに等しい。『芸術』の道は遠いし，広く，無限である。ここが芸術の面白いところでもある。」

これは，多摩美術学校（現・多摩美術大学）の名誉教授となった圓鍔さんの，七十歳を越えた頃の言葉です。

圓鍔さんは若い頃から，作ろうとする作品によって，どの素材を使うかを決めました。当時は，多くの彫刻家たちがそれぞれに専門の素材を決めていて，専門の素材以外での作品づくりはするな，芸術は一筋道であるのがよいと言われていた時代でした。しかし，圓鍔さんは主流とする木彫以外にも，ブロンズ，セメント，樹脂，陶器など，さまざまな素材を使った作品作りや，ブロンズと金属，ブロンズとガラスといった材質の異なるものを組み合わせた作品づくりにも挑戦していきました。そんな作品づくりをする圓鍔さんに対して，まわりの人たちから「八百屋みたいだ。デパートみたいだ。」と揶揄(や ゆ)[1]されるなど，非難めいた言葉を言われることもありました。

しかし，圓鍔さんはそうした非難にも負けずに，信念をもって作品の創作を続けました。

昭和四十九年，東京にある池上本門寺(いけがみほんもんじ)から山門（仁王門）に据(す)える仁王像の制作依頼の話がありました。仁王像とは，仁王立ちと言って，どちらから押しても引っ張っても動かない，両足を平行に踏ん張っていかにも強そうな形をしたもので，邪鬼を払い仏を守るために，寺の左右の門に一対で置かれます。圓鍔さんは，運慶・快慶による東大寺南大門の仁王像を初め，各地の仁王像を見学したり，さまざまな文献・資料を研究したりして，「仁王の姿はどうあるべきか」を自分なりに模索しました。

圓鍔さんが作品を作るときに一番大切にしたのは，その題材のもつ精神をどのように形に表すかということでした。基本的な約束事を大事にしながらも，既成のものにこだわらず，自分の発想や心を入れて創作していきたいという考えです。ですが，池上本門寺は，七百数十年前に日蓮聖人(にちれんしょうにん)[2]が入滅（臨終）された霊跡であるという長い歴史とさまざまな霊宝をもつ大本山[3]です。由緒ある寺の沿革からも，空襲で焼失する前にあった仁王像は，二千三百年も前に作られた歴史ある像であったことからも，寺院側の伝統を重んじる気風が強く感じられました。圓鍔さんは，構想を練るときには何をしていても頭から離れないくらい，くる日もくる日も悩み考える日を過ごしますが，このときはいつもにもましてそういう日が続きました。

構想を練りに練り，いくつもの下図を描いて形を作り，やっと十分の一の小品を作って，役員全員の納得と賛成を得ました。その後二分の一の原型を作り，依頼から四年後の昭和五十三年，七十三歳のときに，伝統を守りながらも，片方の膝(ひざ)を思い切り上げ，普通は背の後ろに下がっている天衣を頭上に舞い上がらせた従来の基本型とは違った全長三．六メートルの仁王像を完成させました。この躍動感あふれる仁王像は，「仏を守護する憤怒(ふんぬ)の像であることを本質としながらも，慈悲(じひ)の心をも内にたたえているように見えてならない」歴史に残る傑作であると言われています。

生涯彫刻作品を創作し続けた圓鍔さんでしたが，母校である河内(かわち)小学校（現・尾道市立御調西小学校）の校庭の石碑には，晩年圓鍔さんが訪れたときの「積み重ね　つみかさね　積み重ねた上にも又積みかさね」という言葉が刻まれています。圓鍔さんが大事にした言葉です。

平成五年には，出身の尾道市御調町に文化・芸術の発信源として圓鍔記念館が建てられました。京都での内弟子時代，わずかにもらう小遣いで見に行った帝展や院展(4)に出されている彫刻作品を前に，自分の思いが熱くなるのを感じていた圓鍔さんの意思を継ぐように，今も多くの人が訪れています。

【注】
(1) からかうこと。
(2) 日蓮宗の宗祖。
(3) 総本山の下にあって，所属の末寺を総轄する寺のこと。
(4) 帝国美術院展覧会と日本美術院展覧会の略。

【参考文献】
圓鍔勝三(1988)　「わが人生」　御調文学　No. 22
圓鍔勝三(1989)　「わが人生」　御調文学　No. 23
祖田浩一(1991)　「名誉県民小伝集　圓鍔勝三」　中国新聞社

エ　授業展開例　－学習指導案（略案）－

勝三の創作へのこだわりがわかる作品づくりを中心にした展開
～　書く活動を通して自分を見つめることを大切にした指導　～

（ア）主題名　理想の実現　１－（４）

（イ）ねらい　「積み重ね　つみかさね～」という言葉を大事にした圓鍔勝三の彫刻に対する考え方や生き方を考えさせることにより，理想をもち，その実現に向け，一歩一歩着実に取り組もうとする心情を育てる。

（ウ）資料名　「夢とロマンを追い求めて　～彫刻家　圓鍔勝三～」

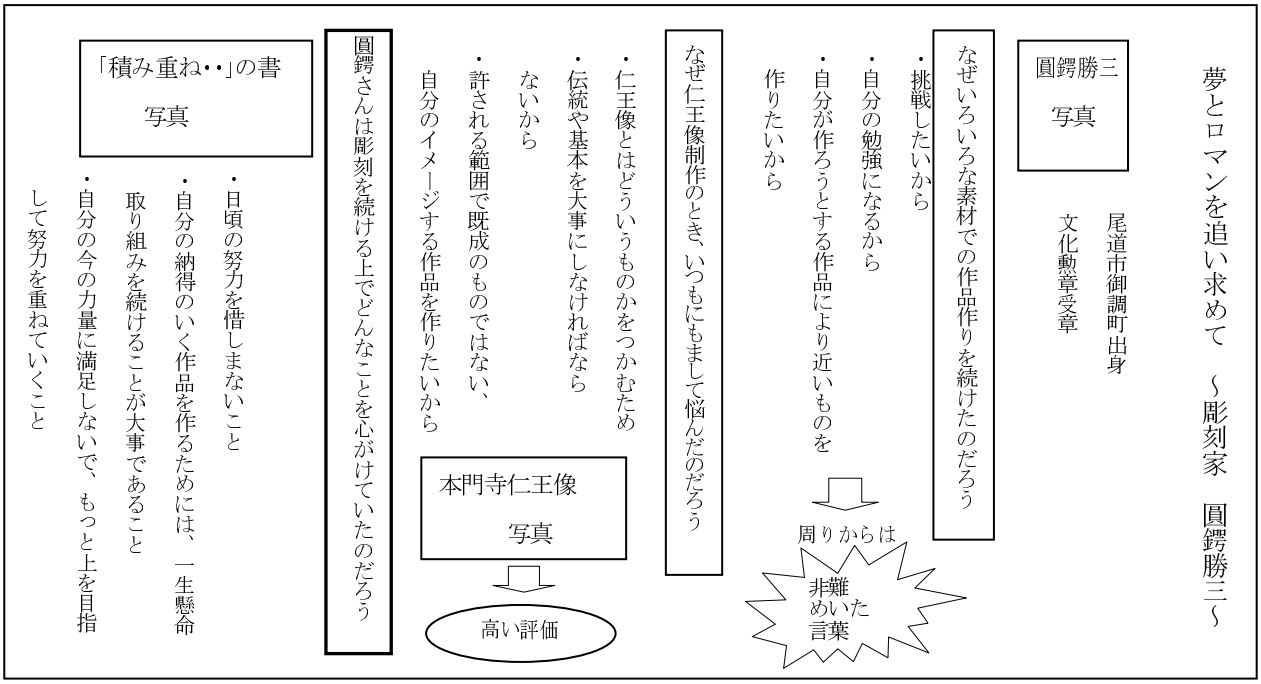
（エ）学習指導過程

	学習活動	主な発問と生徒の心の動き	留意点 （☆評価の観点）
導入	1　圓鍔勝三について知る。	○　二つの仁王像の写真を見比べ，どこが違うか言ってみよう。 ・足を大きく踏み出している。 ・ひも状のものが上がっている。	○　大きな違いを見る。 ○　動きの大きい方の仁王像の制作者圓鍔勝三について説明する。
展開	2　資料を読んで，圓鍔勝三の創作に対する思いをとらえる。	○　非難されながらも，圓鍔はなぜいろいろな素材を使っての作品作りを続けたのだろう。 ・いろいろな素材に挑戦したいから。 ・勉強になるから。 ・いろいろな素材を使うことで，自分が表現しようとする作品を作ることが可能になるから。	○　教師による範読。 ○　自分の信念を貫き通す圓鍔には，周りからは非難めいた目が向けられたことを確認して次の発問に移る。
		○　圓鍔は仁王像を制作するとき，なぜいつもにもまして悩んだのだろう。 ・仁王像とはどういうものかを自分なりにしっかりとつかんで表現しようと思ったから。 ・伝統や基本を大事にしなければならないから。 ・許される範囲で自分がイメージする仁王像を作りたかったから。	○　ワークシートに記入する。 ○　自分の創作へのこだわりと伝統との間で，より納得のいく作品作りに挑んだ圓鍔さんの苦悩をとらえさせる。
		◎　「積み重ね　つみかさね　積み重ねた上にも　又積みかさね」という言葉を大事にした圓鍔さんは，彫刻の仕事を続ける上でどんなことを心がけていたのだろう。 ・自分のめざすことを成し遂げるために，日頃の努力を惜しまないこと。 ・自分の納得のいく作品作りのためには，日々の一生懸命な取り組みを続けなければいけないこと。 ・今あるものや今の自分の力量に満足せずに，もっと上を目指して努力を重ねていくことが大切であること。	○　圓鍔が現状に満足せずに，常に理想の実現に向け努力し続けていることに気付かせる。
	3　学習のまとめとして，自分の生き方と重ねて考える。	○　圓鍔の生き方に触れ，今の自分を振り返って考えたことを書いてみよう。	☆　圓鍔の生き方と今の自分の生き方を重ねて考えることができたか。
終末	4　圓鍔勝三の作品の写真を見る。	○　圓鍔の作品を見てみよう。	○　生きているものへの愛情や平和への思いが伝わる，また夢を感じさせる作品を紹介する。

（オ）資料分析表

資料場面	登場人物の行為		主人公の心情（圓鍔勝三）	生徒の意識の流れ
	中心人物（圓鍔勝三）	その他の人物（他の彫刻家　寺の役員など）		
○芸術に対する勝三の思い。	芸大の教授だった勝三が、教室に出向いて、学生の制作の様子を見たりやりとりをしたりして思ったこと。 「芸術の場合『完成』などあって無きに等しい。・・・」	（資料には登場しない学生とのやりとり） お化けかと思われるような彫刻を手がけている学生にどんな発想があるのかと質問すると「僕はムンクが好きですから、ムンクの影響を受けているように思います。」なるほどムンクの世人観とどこかイメージが一致する。 抽象彫刻に精を出している学生に何を表現しようとしているのかと質問すると「生命の感じです。みなぎる生命力を表現しているのです。」確かに迫力がある。	芸術に対する思い ・学生の作品は複雑さが、生気があって面白い。情熱がくっきりと作品に像し出されているのに感心した。 ・指導に行ったなかが反対に学ぶ人たちから教えられることが多い。 ・芸術には「完成」はあってないようなものだ。 ・「芸術」の道は無限であり究めるのは至難の業である。だからこそ面白い。	○よくはわからないけど、芸術というのは奥の深いもので、それを追求していくのは、楽しいことだけどたいへんなことなんだろうな。
○さまざまな素材での作品作り。	一つの素材にこだわるのではなく、自分の作ろうとする作品のイメージで最適な素材を選ぶのがよいと考えていた勝三は、さまざまな素材での作品作りに挑戦する。	芸術は一筋縄であるのがよい。自分の専門の素材以外は手を出すな。よけいなことはするな。（当時の多くの彫刻家） （いい意味で言っているのではない調子で）「君は八百屋みたいだ。デパートみたいだ。」（工芸として通っていた美術学校の受け持ちの先生）	制作時の素材のとらえ ・木彫家と決められるのはいや。彫刻は一つのものである。 ・表現しようとする作品によって素材を選ぶ。それをこなせる力をもつていれば、素材を何か一つにこだわる必要はない。 ・近年は、美大の先生も生徒もあらゆるものをマスターしようと思っている。やはり私が考えたようになった。	○どうして圓鍔さんはいろいろな素材で作品を作ろうとしたのかな。 ○いろいろな素材に挑戦したという気持ちがあったんだろうな。 ○いろいろな素材から選ぶことで、自分の思う作品作りが可能になるからかな。
○仁王像の制作。	東京の池上本門寺から仁王像の制作依頼がある。 各地の仁王像を見学したり、さまざまな文献・資料を研究したりして、自分の作ろうとする仁王像の姿を模索する。 依頼から四年後、伝統を守りながらも他には類を見ない仁王像を完成させる。 その仁王像は高く評価されている。	（寺の役員の人たちの言葉は伝っていないので、以下の事実から文学化を試みた） 日蓮聖人が入滅された霊跡である長い歴史をもつ大本山である。空襲で焼失してしまった前の仁王像は、一千三百年も前に作られたとされていた。 「圓鍔さんの仁王像は躍動感が横溢である。さらに憤怒の像であることを本質としながらも、慈悲の心をも内にたたえているように見えてならない。まさに圓鍔さんの人柄が滲み出た感じである。」（美術評論家　安達氏）	仁王像制作の際の思い ・戦禍・疫生を征伐し、衆生を救いそして仏を守る仁王像の姿はどうあるべきなのだろうか。 ・仁王がポーズに原型はあるようで、実はないと言ってもよいのでない。 ・基本を勉強し十分に知り、そのうえでその知識をこわしながら自分の考えを入れていくのが芸術の面白さだ。 ・伝統を守らなければならない。とこまでなら自分の発想を形にすることが許されるのだろうか。	○作品を作るときには、事前にいろいろな研究するんだ。 ○圓鍔さんは既成のものにはこだわらないで、自分の発想や心を大切に制作をする人なんだ。 ○伝統を重んじるものを作るときは、圓鍔さんのようなやえをもっている人はたいへんだろうな。 ○どこから悩んだたいへんそうだったけど、みんなに認めてもらえる仁王像ができてよかった。
○母校の石碑に刻まれた座右の銘。圓鍔記念館の様子。	勝三八十八歳のときの書である「積み重ね　つみかさね・・・」が石碑に刻まれ母校に寄贈された。 同じく八十八歳のときの郷里である調川に圓鍔記念館が建設、開館した。		座右の銘 ・「積み重ねた上にも又積みかさね」というのはおかしい表現ではあるが、兵士の創作活動の中で私が大事にしてきた言葉である。 ・京都での内弟子時代、欄間や仏像を手がける先生の元で仕事を学べ、道具の使い方等学ぶことも多かった。しかし、展覧会を見に行くとやはり、芸術作品を作りたいという熱い思いがこみ上げてきて抑えきれなかった。	○調川小学校が母校なんだ。 ○「積み重ね　つみかさね・・・」って、すごい努力を重ね続けた人なんだ。 ○圓鍔記念館にはどんな作品があるんだろう。 ○すごい賞をもらっている圓鍔さんも、小遣いで展覧会を見に行った時代があったんだ。自分もこんな彫刻を作りたいと思っていたんだろうな。

（カ）板書例



【板書の構成】

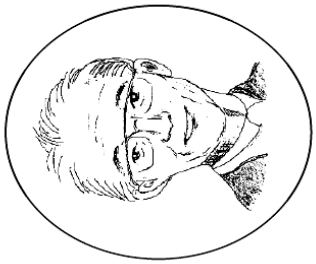
芸術家や芸術作品を扱った教材なので，生徒にはイメージしにくいと思われる。圓鍔さんの写真や作品の写真（絵）などを使って，視覚でとらえることで少しでも考えやすいように工夫した。

信念を貫こうとする圓鍔の行動は，周りから冷たい反応があったり，本人自身が相当悩んだりしたにもかかわらず，結果としてうまく物事が進んでいるので，その過程におけるたいへんさを軽く考えてしまいがちである。しかし自分の信念を曲げずにやり通したところに目を向けることがこの授業では求められる。一つ目の発問での生徒の反応を板書した後で，この創作態度に「周りから非難めいた言葉」があったことを確認し書き加えることで，仁王像制作にかかわって圓鍔が自分の信念と伝統との間で，構想を練り上げるまでの苦悩をとらえやすくなるだろうと考えた。また仁王像の写真（絵）の下には，生徒の反応を板書した後で「高い評価」と書き加えることで，圓鍔が信念を曲げずに努力し続け，その結果みんなに認められるようになったことを印象づけるよう心がけた。

（キ）ワークシート

「〜三鍋勝三郎　彫刻家〜　その生き方を追い求めて」

三年（　　）組　名前（　　）



i　圓鍔さんは仁王像を制作するとき、なぜいつもにらまして悩んだのだろう。

ii　「積み重ね　つみかさね　積み重ねた上にも又積みかさね」という言葉を大事にした圓鍔さんは、彫刻の仕事を続けるうえで、どんなことを心がけていたのだろう。

iii　圓鍔さんの生き方に触れ、進路決定を控えている今の自分を振り返って考えたことを書いてみよう。

（２）活用のポイント

圓鍔勝三は，自分の目指す創作への姿勢を貫き，理想の実現に向け，常に前向きにたゆみない努力を重ねていった。彫刻家として成功を収めた人物である。しかし，まだ封建的で保守的な考えも強かった当時の芸術界にあって，信念を貫くことはそう簡単ではなかったと思われる。

そこで，厳しい状況の中にあってさまざまな素材を使っての作品作りを続けたところや，伝統を守ることと自分の発想を取り入れることの狭間で悩んだ仁王像の制作についての場面を資料に取り入れた。そして，常に向上心をもって努力を重ねていくことを大事にしていたことがわかる言葉も入れ，その生き方にふれることで生徒が自分を振り返り，これからの一日一日の過ごし方を考えていくことをねらっている。

指導に当たっては，作品の写真なども提示・紹介し，圓鍔の業績を考える助けとし，また平和への思いや夢とロマンを生涯大切にした圓鍔の生き方も合わせて知らせたい。

ア　発問の工夫

圓鍔が創作態度を貫いたところと悩んだところを基本発問にし，中心発問では，彼の母校である市内の小学校の石碑に刻まれている座右の銘として常に心していた言葉から，圓鍔の生き方に迫らせる。

イ　書く活動を取り入れた工夫

生涯，理想の実現のための努力を惜しまなかった圓鍔の生き方に触れさせた後，生徒に今の自分を冷静に振り返り今後につなげていくために書く活動を取り入れる。

ウ　作品の写真（絵）を見てイメージしやすくする工夫

導入で関心をもたせることも含め，二つの仁王像を見比べさせることにする。

終末においては，県内の公園に設置されている平和を願った像や家族をモデルにした作品，メルヘンチックな作品など幅広く紹介する。

「花の精」

（３）授業の実際 －児童生徒の反応を踏まえて－

ア　発問の工夫

基本発問では，圓鍔の自分の制作への熱い思いやこだわり，そして伝統も重んじなければというプレッシャーの中でも自分の創作の姿勢を大事にしたことが出てきた。

中心発問でも，「一つのものを作るのに，自分らしさを大切に，新しい表現や技法をできるだけ取り入れ，よりよいものを作ろうという気持ちを忘れないこと」「自分の限界を決めず，努力と経験を無限に積みかさねていき，満足のいく結果を残すこと」など，圓鍔の生き方に迫ることができた。

イ　書く活動を取り入れた工夫

学習のまとめとして書く活動を取り入れた。生徒は中学校第３学年の時期ということもあり，理想をもち，その実現に向け，一歩一歩着実に取り組んでいった圓鍔の生き方と今の自分の生き方（進路を含め）を重ねて，ねらいとする道徳的価値とのかかわりで深く自己を見つめていくことができた。

【ワークシートの記述から】

・「常に今より上を求めて自分を高めていく圓鍔さんはすごいと思う。私も自分ですぐに限界を決めたりしないで，『努力』を忘れず，『進化』していけるような人になりたい。」
・「天狗にはならない。限界をつくらない。ずっと努力を続ける。今の自分は残念だけどどれもできていない。少しずつでもそれができる自分にしていきたい。」
・「自分の進路の実現に向け，口で言うばかりではなく，しんどくても確実に行動に移していくこと，それを続けていくことが必要だと改めて思った。」
・「今までさぼっていた分，この２か月間１年生で習ったところから見直して必死で勉強した。わからなかったところが少しずつわかるようになって，積み重ねていくことは大事だと思った。」

ウ　作品の写真（絵）を見てイメージしやすくする工夫

導入において，作品に関心をもたせ，圓鍔の紹介につなげるために２種類の仁王像を見せた。違いはすぐにあげられたが，圓鍔が制作した仁王像の特徴をより意識させるために，３～４種類くらいの像を短時間見せてもよい。

終末においての作品の紹介は，平和への願いをこめた「平和祈念像」（広島平和公園）や「朝」（広島駅北口），家庭的な雰囲気の「初夏」「新聞」，仁王像と同時期に制作したユーモラスな「夢・夢・夢」，メルヘンチックな「北きつね物語より」など，素材だけでなくイメージも違う作品を見せると，先に仁王像を見せているだけに圓鍔の創作の幅の広さがより印象的に伝わるものと思われる。また県内各地にも作品が設置されているので，授業に際して写真等により提示することで，より身近に感じられると思われる。

（４）各教科等（体験活動を含む）との関連

総合的な学習の時間や学級活動などでの進路学習やキャリア学習との関連が考えられる。

圓鍔が彫刻家を目指したきっかけが小学生のときの小さなできごとであったこと，16 歳で内弟子に入ったのは自分の希望通りの道ではなかったが，そこで努力を重ね，力をつけたことが次につながっていることなど，夢の実現には，今自分のおかれているところで精一杯の努力を続けることが大切であることを考えさせることができる。

（５）心のノートの活用

授業の導入または終末において，「心のノート」のP. 32「夢や理想をもち　それに向かって一歩一歩進んでいく姿は　たのもしいもの」，終末においてP. 33「あなたの夢や理想を実現するために　いま，どうすることが大切なんだろう」のページが活用できる。